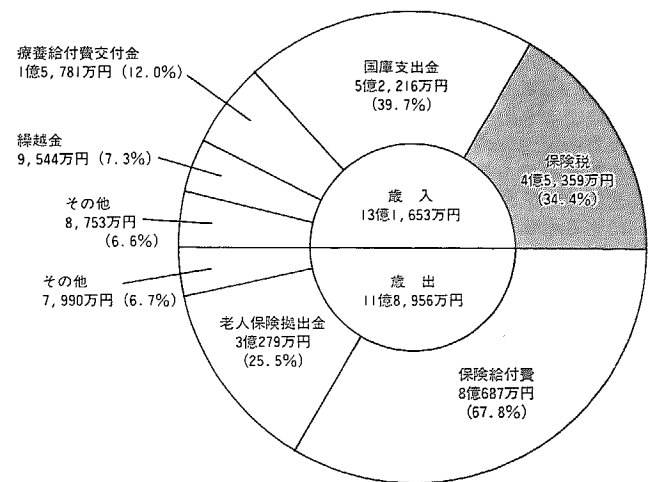


特別会計決算

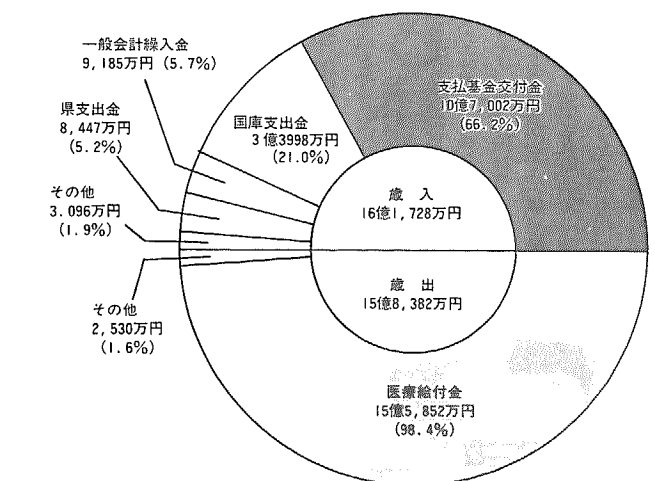
平成4年度

	歳入	歳出
国民健康保険特別会計	13億1653万円	11億8956万円
老人保健特別会計	16億1728万円	15億8382万円

国民健康保険



老人保健



平成4年度の国民健康保険特別会計の決算は、歳入13億1653万円、歳出11億8956万円、歳入は前年度に比べ、1億2697万円を繰り越しました。歳入は前年度に比べ、1億4702万円、12・6%の増でした。保険税の現年度分は、調定額4億5866万円に対し、4億4174万円が町に入り、収納率は96・3%。前年度に比べ465万円の増収でした。

歳出は前年度に比べ、1億1549万円、10・8%増加しました。

平成4年度の平均被保険者数は6131人で、前年度より34人減り、また、加入率も0.2%減少しました。監査委員の決算審査意見は歳入の増加について「保険税収納額の増加、国庫支出金の療養給付費や財政調整交付金の増額の結果である」と述べ、歳出の増加についても「被保険者数の減少にもかかわらず、受診率の増加と保険給付費の増額によるもの」と分析し、「今後も引き続き保健指導の重点事業の推進と適正な財政を望みます」と結んでいます。

老人保健特別会計の決算額は、歳入16億1728万円、歳出15億8382万円、歳入は前年度に繰り越しました。内訳はグラフのとおりです。

平成4年度の黒崎町の老人医療費支給対象者は1843人(年間平均)で、前年度に比べ98人、5.6%増えています。診療費総額は15億6935万円、前年度より1億727万円、7.3%の伸びです。老人保健対象者の受診率は年間1人当たり21・4回で1人当たりの平均医療費は85万120

9円、前年度に比べて1.6%の増となっています。歳入歳出の伸びていることについて、監査委員の決算審査意見は「対象者の増加に伴い、受診件数も確実に伸び、1人当たり医療費、1件当たり医療費も増加している」と指摘し、「本町の老人医療は、医療環境に恵まれており、老人福祉から喜ばしい。今後とも、安易な受診・乱診・重複医療が指摘されているところであり、治療効果を阻害しないよう保健指導を望みます」と述べています。

黒崎町の今昔

執筆 宮田 栄門

ほんと？明治の中期ごろ大野で養蚕が流行っていた。明治二十八年(一八九五)七月二十一日記事

西浦原郡金巻村大字大野は戸数僅かに五、六百を有し、商業のみにて生計を営むことすこぶる困難なるを以て七、八年前より養蚕事業に着手せしが、年を追って其業発達し特に本年の如きは桑葉騰貴のため損失を被るならんと、いずれも落胆せし程なるに其結果は之と反して非常の上出来なりしを以て、諸方より製糸家群衆して高価に買い取り、一同始めて喜色を帯びたるが同地の蚕種は統て信州製のよし、且下夏蚕は二眼起にて成育よろしく、又秋蚕も夏蚕に倍して飼育する予定にて、既に手金を附して同地の北進館へ注文したるが、同地にて一等蚕を得たるは浅妻信太郎氏外十五、六名にて浅妻氏は目下養蚕家に向ひ、同郡蚕糸業組合へ加盟の儀を勧告中なりと云へり。

金巻村大野(戸数五、六百)

新聞からたどる黒崎の歴史 (七)

明治の中ごろ大野では養蚕が盛況で諸方から買いつけ業者が訪れ、にぎわっていた。

戸)では、七、八年前の明治二十年(一八八七)ころから養蚕が流行り、年々事業を拡張してきたが、本年は桑葉が騰貴し大きな損失を被ると落胆していた。ところが結果はこれに反し、夏蚕の成育が非常に良く上出来となり、諸方から製糸業者が町へ繭の買い付けに入り高価に売れ、町の人たちは喜び秋蚕もまた夏蚕に倍して飼育する予定で北進館へ蚕の注文済みのことである。

昔から大野町を中心とした村々では綿の生産が行われていたと伝えら

れ、大野仲町小山呉服店所蔵の古文書「嘉永七年寅(一八五四)」にも、江戸時代末期の大野町に株式による白木綿、紡車被糸売買が行われていたとあり、諏訪町三太郎(箱田輪店)が同買商人の定宿となり、外に三十一軒の売商人定宿があった。その取引のいくつかが記されている。これらのことから、大野やその周辺の村々で綿の生産の盛んだったことは考えられるが、新聞によれば、今から百余年前の大野に養蚕が流行り、町の中、畑があつたなど、今ではとも想像

もできない。筆者は町のこの養蚕事業について調べようと、今年夏ころから聞き取り調査を行ってきたが、すでに百余年も前のことである人も殆どなく、断念しかけていたところ、新地浅妻さん(明治三十五年生)九十一歳から耳よりな話を聞くことができた。浅妻さんが七、八歳のころ丁内の宗村豆腐店屋号上新田屋の先々代太六さんが養蚕をしており、金巻念寺の川端あたりや、上新田にあった桑畑まで蚕の餌の桑の葉摘みの手伝いに行っていたという。蚕の世話の手伝いなどもしたので養蚕のことも覚えており、次のように教えてもらった。

みよけた(孵化した)ばかりで、一mmから二mm位しかない小さい蚕には、桑の葉をみじん切りに細かくきざんで食べさせた。蚕の食欲は旺盛で、ずかずかと大きくなり、一cm位から大きくなる毎にきんをぬぐ(脱皮)。蚕の食欲は前にも増して「ワサワサ」と雨の降るような音をたてて桑の葉を切らずにそのまま食べさせ、三cmから四cm位になると蚕は自分の口から糸を吐き出し上手に繭を作ったその中に入る。これが繭の出来るまでであるが、出来た繭は鍋の中に入れて煮立て、糸口を出して糸を取

るのだという。他に聞き取りを続けるうちに養蚕に関する次のいくつかを取材することができた。諏訪町の高橋ミツイさん(大正十一年生)が二丁の実家でまだ小学生だった昭和五、六年ころ、大野の新聞に養蚕をしてる家があった。今、ミツイさんは家の名を思い出せないが、その家は柵に一杯蚕を飼っており、子供たちがよく蚕を買いに行つたものだという。ミツイさんは兄と一緒に買って来たまだ数mm位の黒い蚕の子を、息ができるように穴を空けた菓子箱の中に入れて、桑の葉を摘んでくると細かく切つて食べさせ、蚕が幼虫から成長して繭になるまでを観察したのだという。

みよけたばかりの蚕は黒く、成長すると白くなる。当時大野の子供たちの多くが蚕を飼っていた。

ミツイさんの判らなかつた養蚕をしていたという家は、新町の野上元三さん(明治四十二年生)から聞いて判つた。それは同じ丁内の長谷川豆腐店の当主晴雄さん(大正九年生)の父晴作さんというところだった。晴雄さんは親たちが蚕を育てていたのを覚えており、今の木村耳鼻科医院脇の駐車場付近が桑畑だったというのである。また野上さん

取材協力
小林藤司さん、高橋ハルノさん(明治四十年生)、小林省吾さん(大正二年生)、野上元三さん、高橋ミツイさん、長谷川晴雄さん

